



Parents and children without blood relation.

血縁のない親子

Interviewee

Ms. Danny Johnson
Donor child

Q. 自己紹介をお願いします。

現在、米国ラスベガスに在住している。この街で人生の大半を過ごしてきた。コーチやモチベーション・スピーカーとして働いている。特に、女性がオンラインでビジネスを成功させる手助けをしている。また、クライアントにレジリエンスを身につけるよう指導している。

13歳のとき、父親が精子提供のことを明かした。体操教室に向かう車の中で、父親が「俺はお前の本当の父親じゃないことは知っているよね」と言ったのを覚えている。父親は、若い頃に病気を患って不妊になったため、ドナー精子を使ったと説明した。両親は匿名のドナーを使い、医師からは決して子供には言わないようにと忠告されていたのに、どういうわけか父親は考えを変えたみたいだ。

26歳のとき、自分がドナー側からの遺伝で、遺伝性血液疾患の素因があることがわかった。それ以来、DNA検査サイトを通じて、約32人の異母きょうだいがいることを知った。

兄弟が一人いる。彼も精子提供で生まれたが、彼の場合、母親の不妊治療担当医が人工授精の過程でこっそり自分の精子を使ったため、主治医が生物学上の父親となった。

高校在学中に養子に出した娘がいる。そのことがトラウマにならないよう、娘に

は最初から自分が養子であることを知ってほしいと強く望んでいた。自分と彼は「セミオープン」の養子縁組を選んだ。つまり、自分と当時のボーイフレンドは、養子を希望する家族を複数のプロフィールから選ぶことができた。養親は大卒であること、別の州に住んでいること、すでにもう一人子供がいることなどの条件をつけた。養親候補の手紙を読み、自分たちが選んだ夫婦は娘に心を開いてくれるだろうと確信した。手紙の中に、自分たちにはすでに養子の息子がいて、その子にもすべてをオープンにしていると書かれていたから。

娘はロサンゼルス育ちで、現在26歳になる。現在はラスベガスに住んでいるので、定期的に連絡を取りやすい。娘は自分のポッドキャストの編集者兼プロデューサーとして働いている。約6年前にポッドキャストを始めたばかりの頃、娘にメッセージを送っていた。当時、娘は19歳だったので、技術に詳しく、必要なスキルを学べるだろうと思った。娘はその後、フルタイムでポッドキャストを編集するビジネスを始めた。娘はパートナーと別れるためにロサンゼルスを離れ、ラスベガスに引っ越してきた。こっちの方が、物価も安いからいいと思う。

Q. どのようにしてドナーから生まれたことを知りましたか？ そのときのことを詳しく教えてください。

父親とその話が始まったきっかけは、ちょうどダニエル・スティールの“Mixed Blessings”という本を読んだところだった。その本について父親に話したところ、父親は、精子提供のことを打ち明けた。自分が養子でないと確信していたので、とても混乱したことを覚えている。しかし、父親が“人工授精”と言ったとき、本を読んだばかりだったので、すぐに理解した。



それを知った夜、眠れなかったので、両親の部屋に行き、母親を起こして本当かどうか尋ねた。母親は、父親と話している間、部屋で待つように言った。母親は部屋に入ってきて、「そうよ、本当よ、彼はたぶん（あなたの父親）じゃない、確かなことは言えないわ、私たちは避妊具を使っていなかったし、ドナーは匿名だったし…」などと言った。記録はなく、提供者は匿名であり、それ以上の情報を知る方法はないようだった。その時、自分の弟も精子提供で生まれたことを知ったが、母親はそれを弟に対して秘密にするよう主張して断固として譲らなかった。母親はそれ以上、そのことを話したくない様子だったので、話はそれで終わった。

精子提供について考え始め、いったい、どんな人が提供するのかと自問した。自分の中での理論的結論は、「お金が必要な人」だった。そのため、ドナーは薬物中毒者でホームレスである可能性が高いと考えた。結局うつ病と闘うことになったが、それは自分の出自に対する羞恥心と、ドナーはドラッグを買うお金のために自慰行為をしているホームレスの男だ、「私の半分は麻薬中毒者」なのだと自分に言い聞かせたことからきていた。

アイデンティティの断片化でかなり苦しんでいた。鏡を見ても自分が誰に似ているのかわからず、迷いを感じていた。高校で遺伝学を学び、黒髪が優性遺伝であることを知っていた。父親が黒髪なので、なぜ自分と弟が金髪なのか、いつも少し混乱していた。今ならもっと納得がいく。また、父方の家系や大好きないところたちと遺伝的につながっていないことに喪失感を感じていた。それに比べると、母方の家族はいつもさまざまな問題を抱えた「クレイジー」な人たちだった。

Donor conception の話題が再び持ち上がったのは 2017 年より少し前のことだった。

23andMe にログインし、自分にドナーきょうだいがいることを知った。父親が精子を提供したという事実を知らないドナーの実際の娘だろうと思い、最初の 1 人に連絡を取った。結果的に、それは異母きょうだいで、同じように精子提供で生まれていた。その後、自分と彼女はデータベースを通じて最初のいところを見つけ、その人がドナーを特定するのに役立った。

ドナーと話すことができ、精子を提供した動機を知ることができた。彼は気さくで、嫌がらずに写真や医療情報を提供してくれた。その後、他の出生者から、多くの出生者はドナーとのコンタクトを確立するのがもっと難しいこと、そして多くのドナーは質問に全く答えてがらないことを知った。

自分が異母しまいを発見してからしばらくして、弟も自分が精子提供で生まれたことを知った。自分のドナーを見つけたあと、両親に、公表しなければ自分が弟に知らせると告げた。当時自分は 33 歳だった。弟はその場では、まあいいよ、と答えたが、後でわかったのは、自分が黙っていたことに腹を立てていた。知ったときはまだ子供で、両親から言うなどと言われていたのだと彼に伝えなければならなかった。その後、弟は自分のドナーが母親の主治医だったことを知った。ドナーは亡くなってしまったが、自分の精子を使って患者に人工授精を行ったとして、家族から訴えられたという話もある。HBO のドキュメンタリーにもなった。ドナーは小児性愛者としても知られていた。弟は DNA 検査を受けて、異母きょうだいも見つけた。

Q. なぜ、自分の体験を人々に語ろうと思ったのですか？ 自分の経験を話すことで、どのようなことを期待していますか？



不妊産業に影響を与えるために自分の話をしていくわけではない。ドナーを利用する人を批判はしないが、個人的には子供のニーズを考慮しない利己的な選択だと考えている。ドナーの身元を知ることができて、子供も最初から知っているのであれば、そのやり方は自分としては問題ないと思う。

突然、ドナーから生まれたことがわかると、喪失感と裏切られたという気持ちが生じる。その気持ちをシェアすることで助けになればと思っている。その事実を処理し、ドナーを見つけるまでに20年以上かかったが、今は平穏を見出している。それとは対照的に、自分のドナーきょうだいのひとは、37歳のときにドナーの存在を知ったばかり。彼女の話聞くことで、他の出生者が喪失感や悲しみを克服する助けになるのを願っている。突然、自分がドナーから出生していることがわかると、アイデンティティの変化が起こるが、それは、そのような経験がない人には全く理解できないようなことだ。

自分のアイデンティティに苦しんでいた子供の頃に、チャットルームや他の人が共有するビデオにアクセスできていたら、孤独を感じることは少なかったかもしれない。

Q. 人々からどんなリアクションがありましたか？

まるで見世物のように、自分の話を本当にクールだと思う人もいる。ボーイフレンドは、自分のことを面白いパーティーのネタのように扱うこともある。カジュアルな文脈では、それを軽いものとしてあしらうこともある。時間は癒してくれるが、いつもハッピーな話ではなかった。

自分は否定的な反応を示したことはないが、異母きょうだいの中には自分の経験を

をシェアすることに興味がない者もいる。プライベートな人もいれば、両親を守りたい人もいる。これはフェアなことではないと考えている。両親のために秘密を守ることは子供の責任ではないから。自分の両親に対しては、秘密を守るつもりはないはっきり言った。

Q. 他にも、たくさんの出生者がYouTubeなど、いろいろな媒体で語っています。他の人の経験を聞いて、どのように感じていますか？

他の人の経験を聞くことはとても役に立つ。たとえば、“We are donor conceived”というフェイスブックのグループがある。このグループは、自分がドナーからの出生者であることを知ったばかりの人たち（特に偶然に知った大人たち）や、家族がただ“水に流したい”と思っている人たちにとって、素晴らしい支えとなっている。このグループは、彼/彼女らをサポートし、承認し、大丈夫だと感じられるようにするために存在する。若い世代（およそ20歳）は、最初からドナーから生まれたことを知っているため、より適応し、順応している傾向がある。同性の両親を持つ人も多い。契約上、自分の世代（30代半ば以降）は、ドナー情報を公開せず、秘密にしていた「暗黒時代」に育った。

出自を知らないままにしようとする人もいるが、自分は好奇心の方がまさっている。とはいえ、その事実を自分の中で処理するのに長い年月がかかったし、最終的には自分のドナーがホームレスのジャンキーではなく、いい人だったという事実で安堵した。しかし、最悪の事態を想定して長い年月を無駄にしまったことに若干の後悔を感じている。

ドナーとネガティブな関わりを持つ人々に同情している。多くのドナーは、子供たちが「自分の人生を台無しにする」と



恐れているように見えるが、実際には、ほとんどの場合は、ドナーの写真と健康情報を求めているだけだ。明るい兆しは、異母きょうだいとのつながりだ。彼/彼女らの存在にいちばん助けられた。自分のドナーきょうだいたちのフェイスブック・グループもあり、同じように助けられている。

Q.ドナーと会いましたか？ どう感じましたか？

ドナーと初めて話したのは電話だった。最初はとても緊張していたが、最終的には1時間も話した。ドナーが主導権を握り、自分の生い立ちや健康状態について話し始めた。その後、自分と4人のドナーきょうだいはニューヨークへ行き、直接ドナーに会った。

ドナーと身体的特徴が似ているだけでなく、性格とユーモアのセンスがドナーとかなり似ていると感じている。ふたりとも旅行が好きで、文章を書くのが得意だ。また、眼鏡や歯列矯正が必要なこと、えくぼがあることなど、異母きょうだいとの共通点も多い。ドナーとドナーきょうだいに会ったことで、自分自身についての多くの疑問が解けたような気がした。

Q.ドナーきょうだいと会いましたか？ 遺伝子が半分共通というのはどんな感じですか？

最初に会った2人の異母姉妹と一番仲がいい。最近、彼女たちの結婚式に出席した。フェイスブックのグループには現在12~15人ほどが参加しているが、グループが大きくなればなるほど、親しくなるのは難しくなる。近くに住んでいる人はいないが、仕事で出張が多いので、ほとんどの人とは直接会っている。みんな生活環境はまったく違う。その中で、4人中3人だけ

が、自分がドナーから生まれたことを子供の頃から知っていた。

Q.ドナーはなぜ提供したのだと思っていますか？

家族に不妊で悩んでいる人がいて、それで精子提供のことを知ったのだという。そしてイエローページで提供先を探した。夫婦を助け、お金も稼げると思ったのだ。クリニックには新しいドナーを探す手段がほとんどなかったため、彼は何度もドナーになるよう求められた。結局、彼は15年間提供し続けた。同じドナーを使って複数の子供を妊娠出産した親もいたため、クリニックは何らかの記録を残していた。

数年後、彼は看護師と親しくなり、自分の精子が妊娠に成功すると、看護師が公表するようになったという。彼は80回で数えるのをやめた。ドナーきょうだいはすべて半径15マイル以内で生まれているので、ドナーきょうだいが知らずに付き合ったり、結婚したりした可能性も懸念される。

クリニックはカリフォルニアのベイエリアにあった。きょうだいの多くは現在もカリフォルニアにいる。

Q.精子提供について、規制が必要だと思いますか？ どのような？

一人のドナーが提供できる回数を制限する規制が必要だと思う。現在では同じドナーが、自分のドナーのように長い間提供することはできないだろう。

現在、ドナーに課せられている基準のいくつかは、少しエリート主義的だと感じている。たとえば、身長180センチ以上、30歳未満、大卒以上といった条件だ。自分のドナーは、そのどれにも当てはまらない



かった。まるで「完璧な」精子を求めているかのようで、それはおかしなことだ。

精子提供は赤ちゃんと人間の生命を商品化するものだと感じているので、個人的には、精子提供は一切行わないでほしい。子供が欲しいからといって、何が何でも子供を授かるべきだというわけではない。もし自分が不妊症だったら、パートナーのために子どもを産むためだけに、他人の卵子を使うことに違和感を覚えただろう。もちろん、環境要因が精子と不妊の危機を招いたことは理解している。

自分が見るところ、子供の実の父親ではないという事実で苦しんでいる父親は多い。このことが離婚の原因になっているケースも多いようだ。

Q. 育ての父親との関係は? 育ての父親に対して、どんな気持ちを抱いていますか?

父親とは、今ではかなり親密になっている。父親は、娘が「本当の父親(real dad)」に会えたことについてコメントしたことがあった。「本当の父親」はドナーではなく、育ての父親なのだと訂正し、安心させなければならなかった。彼は子供ができないことに不安を持っていたので、父親はそのことについて話したがらない。しかし、あえてそれについて話すことは、私たちにとって大きな癒しとなった。

遺伝的な父親でないにもかかわらず、自分と弟を育ててくれた彼を心から尊敬している。

Q. 年齢とともに、考え方が変化していますか? どのように?

特に自分の出自とドナーきょうだいの数を知ってから考え方が大きく変わった。子供の頃、ドナーきょうだい他にどれだけいるのか知らなかった。

今となっては、不妊治療産業がいかに大きく、人々がART治療にどれだけのお金を費やしているかを知っている。個人的に、メキシコで代理出産をしたゲイカップルを知っている。その赤ちゃんは、代理出産にありがちな超未熟児で生まれた。この人たちを愛しているが、彼らが家族を築いた方法を憎み、葛藤を感じている。

また、代理出産をする余裕のない人たちはどうなるのか? 経済的に追い込まれ、最低の状態にある人たちから搾取しているように思える。例えば、もし自分が大学時代にどうしてもお金が必要だったなら、自分の卵子を提供しただろう。そして、いつか自分の人生に現れるかもしれない実子のことなど、考えてはいなかっただろう。

Q. 昔から、育ての父親と血が繋がっていない子供はいました(母親が別の男性と関係を持った場合など)。精子提供で生まれることと、それはどのように違いますか?

子供から見たら精子提供と、不倫の場合とで、類似点はあると思う。どちらも、子供は父親を知りたがり、同じようなプレッシャーと秘密があると想像する。しかし、ある意味で、不倫のシナリオの方がもっとしんどいかもしれない。たとえば、実の父親は生きていて、彼/彼女を育てられたかもしれない。しかし、ドナーからの出生者の場合、こうしたことを子供は望むことはできないという違いがある。

Q. 卵子提供や代理出産について思うことがあれば教えてください。

アメリカの大学キャンパスでは、若い女性に卵子提供を呼びかける企業が盛んに広告を出している。支払われるお金は魅力的だ。彼女たちの多くは、子供のことなど



考えていないだろう。この業界は略奪的な感じがする。

また、「提供」するためにお金をもらうのであれば、それは実際には提供ではない。仕事に近い。金銭的な側面がなくなれば、この概念にもっと安心感を覚えるだろう。

卵子提供者は厳しい基準を満たさなければならないが、代理出産の場合は子宮があればいいという感じ。代理母と依頼親の間に社会的な格差があることも多く、搾取的だ。医学的に言えば、代理母にも子供にも多くのリスクが伴う。

Q. その他、伝えたいこと。

ドナーから出生した子供たちは、生まれたときから自分の出自を知らされるべきだと考えている。そのことについて話したときの記憶がないほど、子供にとってそのことが普通のことになるべきだ。その事実を知っている子供たちは、いつも最も順応し、適応している。害があるのは、それを知ったときのショックだ。

「精子提供がなかったら、あなたはここにいないことさえなかったでしょう」と言ってくる人がいる。自分はそのような言い方をされるのが好きではないし、自分の存在は、精子提供の言い訳にはならない。子供をこの世に誕生させる方法として、これを第一選択肢にすべきではない。たとえ善意でやっているとしても、業界は金にがめつく、親を第一に考える。自分が娘を授かったとき、多くの人が「知り合いに子供ができない人がいる、その人に娘を差し出すべきだ」と自分にアプローチしてきた。それはまるで、娘をハゲタカに差し出す肉片のように扱うかのような感じだった。しかし自分は、自分の焦点は娘に最高の両親を与えることであって、不妊のカップルを"気持ち

よく"させることではないと断固として主張した。

(2024年2月)

Ms. Danny Johnson

現在、米国ラスベガスに在住。コーチおよびモチベーション・スピーカーとして活躍している。

13歳のとき、自身が精子提供で生まれたことを知らされた。

23andMe やデータベースを通じて異母きょうだい・ドナーと出会う。実の父親には118人の子供がいることなど自身の経験をYouTubeなどで発信している。

YouTube

<https://www.youtube.com/@TheSweatyBetties>

HP

Top Motivational Speaker | Do Over Danny
(dannyj.com)